

「奥さんこりゃ 火じゃございません 色でございます。」

森田草平さんとの思い出

山都飯田には戦火を避けて沢山の文士が疎開しておられた。幸い父は味噌醤油醸造業をしており、市内のいろいろな方との交流があり、地元の日夏耿之助さんなどと交流があった。

正直なところ戦中物資は払底し、文士の方々も慣れぬ土地で生活に困っておられた。

疎開文士にはフランス文学の岸田国土、「煤煙」「細川ガラシャ夫人」などを書かれた森田草平さんなどがおられた。森田さんは山本村朝臣惣^{あつそ}教寺に疎開しておられた。父が訪ねた際のことであろう、小さな本堂の部屋には天井からは傘付きの裸電球が一本ぶら下がっている丈で、窓際からは遠く、読書や執筆には暗く不便をしているのを目の当たりにしたようであった。

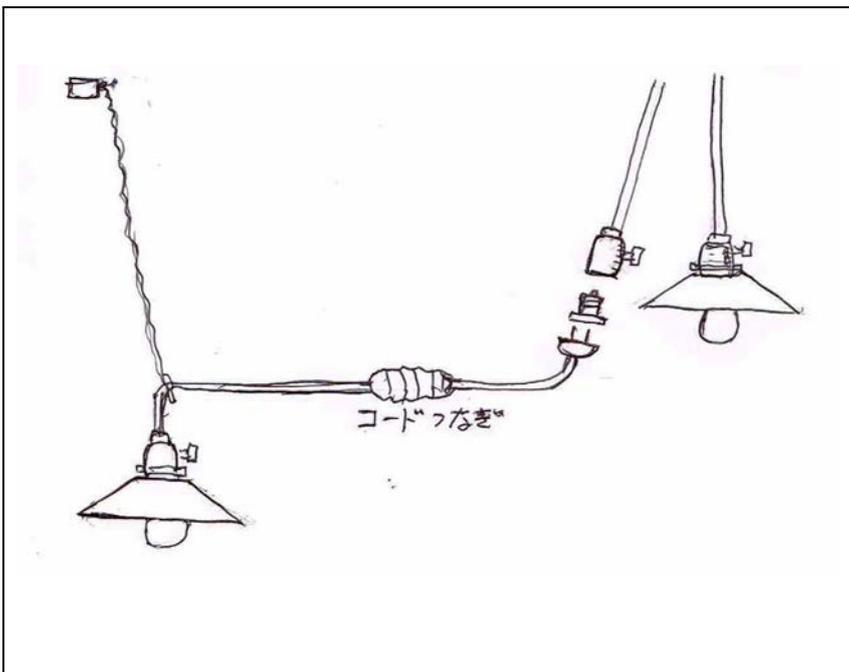
どうも、「息子に電気が好きなのがいるので、何とかなるかも知れません。」とでも、いい顔をしてきたのであろう。森田草平さんが飯田に疎開されたのが1945(昭和20)年2月、私が小学校4年になった初夏のことであった。

家に帰るや「森田草平さんの電灯を何とか延ばしたいのだが、、、」と父が言った。そう言われても、当時はみんな店仕舞いで電気コードなど売っていなかった。家にあった古い電灯コードやソケットなど掻き集めた。絶縁テープもなく布を何重にも巻いて絶縁し子供細工で継ぎ合わせ、何とか一本の延長コードをまとめた。父に見せ、家の電灯から延長した先に電球が灯るのを確認した。

(中古のコードを素人が途中で繋ぐなどは、今の常識からすれば危険極まりないこと。)

さあ数日の後、そのコードを持って自転車の後ろに乗せられ二里ほどの道を山本村の惣教寺を目指した。小さい境内には枝垂れ桜があり、蝉時雨だった。

踏み台などを運んで、机の上に乗り込んで鴨居から紐を結んで絵のように窓際の昼間明るい机の上まで、どうにか電灯を延ばすことが出来た。「良い坊やで、、、」などとお礼を言われ、家路に就いたことであった。森田草平さんは、非常な近眼で周り何重にも光る強い眼鏡を掛け、その上眼前に書物を持ち上げ上下動かして読む方だった。



南の窓際まで電灯を伸ばした。



森田草平肖像 森田草平撰集より

その頃、味噌醤油は統制物資で月一回の配給だった。他の副食も欠乏し味噌醤油は生活の綱だった。森田草平さんも何度か家を訪ねてこられ、その度に味噌醤油をせがまれた。父は、「配給する物資を横流しで売ることにはできない。今度だけですよ。」と帰り際に黙って差し上げていた。しかし、またお見えになった。「難破船の救命ボートに乗っているようなものだ。もはや8人満員で、これ以上乗ったら皆助からない。そう言う場合9人目の人は涙を飲んでお断りする以外にない。」

と切々と訴えた。(この会話は私の耳に残っている。) この話は、森田草平選集 第5巻 日記 理論社 1956 に先生の筆で書き残されている。森田草平氏の肖像も同選集より。

終戦後の第1回の衆議院選挙の時、完次叔父が立候補し、味噌醤油の誼で応援演説をお願いすることになり、足繁くお見えになるようになり、その度、家の中央の座敷で刻み煙草を吸っておられた。煙草盆の火鉢に炭火を準備するのは私のお手伝いだった。家中煙草臭くなるし子供心に嫌だった。茶目だった私は、煙草盆の火鉢の炭の先に朱墨を塗り、程よく灰をまぶして置いた。

その頃小塩完次の選挙のため、とよ子叔母が飯田に滞在していた。やがてお見えになった森田草平先生は、いつものようにキセルに刻み煙草を込め何度か吸ってはみたが、どうしても火が付かない。ややあって「奥さん こりゃ火じゃございません、色でございます。」と訴えた。居合わせたとよ子叔母は事前に何も知らず「あらあら、、」と困ったようだった。だが、酷く叱られることもなかった。元より完次夫妻は禁酒禁煙主義者だった。後々武蔵野の完次叔父宅を訪れる度にとよ子叔母から私への語り草になっていた。

なお、森田草平氏は、疎開中に共産党に入党しておられた。折からの選挙では完次叔父の他、同党候補を推し、いわば自転車のペダルを左右同時に踏むこととなり軋轢を生じた。当時私は小学校5年であった。

(2014.11.11)(2015.05.31 加筆訂正)